24. 関節鏡を利用したミニオープン腱板修復術の経験

菅谷啓之，岡崎壮之，栗原　真
土屋明弘，園田昌毅，渡辺淳也
（川鉄千葉）

腱板中小完全断裂および不全断裂に対し，関節鏡を利用したミニオープン腱板修復術を行った。対象は9例10肩で，完全断裂5肩，不全断裂5肩であった。術後平均5.9ケ月で，JOA score は術前71.3点より85.3点へ，UCLA score は17.1点より23.9点へと改善した。本法は付随病変に鏡視下に対処でき，術後早期に理学療法が開始できることなどの利点があり，腱板中小完全断裂・不全断裂に対しては有用な方法と考えられた。

25. 関節近傍骨折におけるメイプレートの使用経験

長嶋　久，矢作龍二，酒井洋紀
（塩谷総合）

関節近傍骨折に対して使用したメイプレートの治療成績について報告した。脛骨遠位部骨折5例，脛骨近位部骨折4例，脛骨骨幹部骨折1例，上腕骨近位部骨折1例の11例について検討した。術後の整復度は，優7例，良3例，可1例であり，11例中10例で骨癒合がみられた。骨癒合を得た10例の総合評価は，優6例，良2例，可2例であり，関節近傍骨折における内固定材料として有用であると考えられた。

26. MCTD に合併した骨髄炎の2例

内海昌浩，宮本和寿（国療下志津）
杉山隆夫　（同・内科）

緩解期を迎えたステロイド内服治療中の混合性結合組織病（MCTD）に合併した骨髄炎を2例経験したので報告した。MCTD などの膠原病では血液データがあまり感染を反映しないため診断に難渋することも多い。経験した2例でも CRP は感染を反映したものの，白血球数，血沈，体温は感染をほとんど反映せず，初期診断に難渋した。

膠原病患者では各個人のデータを把握し慎重に判断する必要があると考えられた。

27. 鎖骨遠位端骨折に対する Bosworth 変法の治療経験

加藤　剛，重田博夫，木元正史
山岡昭義，森川嗣夫，斎藤　隆
（船橋中央）

我々は鎖骨遠位端骨折 Neer Type 2 および2＋3に対し Bosworth 変法を施行した10例につき調査した。全例臨床結果は良好だったが本法の欠点であるスクリューのゆるみが2例に生じた。その原因としては鎖骨の三次元的な動きが考えられ，これに対応すべく，手術時に鎖骨へのドリル穴をスクリュー軸径より大きく開けていたが十分でなく，今回の検討から烏口鎖骨靱帯の再建がゆるみの防止に有用である事が判明した。

28. 鎖骨遠位端における post-traumatic osteolysis の2例

黒川雅弘，山口喜一郎，豊口　透
石毛徳之　（八街総合）
山口清直，高瀬　完，阿部圭宏
（小見川総合）
原田義忠　（千大）

症例1，26歳男性，会社員。祭りで数日間，御輿をかついだ後より，右肩痛が出現した。保存療法を行うも疼痛が軽減せず，受傷後6ケ月に単純X線像で右鎖骨遠位端に tapering type の溶解像が認められた。受傷後7ケ月で右鎖骨遠位端切除術施行。病理組織像では骨壊死は認められなかった。術後経過は良好である。

症例2，26歳男性，大工。自動車事故による，多発外傷のため受診。受傷直後より右肩鎖関節痛が持続し，受傷後2ケ月の単純X線像で右鎖骨遠位端に cupping type の溶解像が認められた。同時期の MRI では，T2像で鎖骨遠位に高輝度の部分が認められた。保存療法により症状が軽快し，原職に復帰している。

29. UHMWPE tibial insert の層状剥離現象（delamination）と破壊について

渡辺英一郎　（千大）
金枝敏明　（岡山理科大工学部）
永田員也（岡山県工業技術センター）

人工膝関節 UHMWPE tibial insert の破壊形態は特有かつ劇的である。当教室および関連施設で摘出された PE insert23個に対し実体顕微鏡，走査電子顕微鏡観察を行い，PE 破壊機構について考察を加えた。delamination，breaking といった疲労破壊が主に見られ，内部は表面下300-600 μm 付近を境界とする二層構造を呈し，さらに境界部には粒界破壊，crack の成長が観察でき，付近への応力集中の可能性が示唆された。